

ホームページ <http://www2.ttcn.ne.jp/ref-pj/>

内 容

- * イタリア地域精神保健研修に参加して
公財)正光会 デイサービスセンター「結い」じょうへん 渡部 京子
- * 第13回イタリア地域精神保健視察研修ツアーに参加して
実行委員・事務局 中野 良治
- * 事務局からのお知らせ
○ リフレッシュセミナーin 東京 2019 ～故仁木美知子さんを偲んで～
実施報告 速報

* イタリア地域精神保健研修に参加して

公財)正光会 デイサービスセンター「結い」じょうへん 渡部 京子

バザリア法により公立精神病院がなくなってから40年。

イタリアは経済危機のニュースがあったけど、障害者支援の現状はどうなっているのだろう？市民の生活はどうなのだろう？と疑問を持ちながらの参加でした。事前勉強をすればもっと具体的な情報を吸収できたことでしょうか？と悔やみながらの振り返りをしています。

講義を聞いていると「システムの形はできているが40年間の経験の上で行くサービスができるのか？」と考えながら、予算が減らされる状況の中でチームとして精神保健医療に取り組まれているイタリアの現状が分かってきました。

何ごとも継続して良い支援を続けることは、「進化し続ける努力とパワーそして工夫が大事だなあ！」と国が違っても同じ悩みに取り組まれていることを感じました。

「病院のサービスを地域に拡散しているだけなのではないか？」と言ったワーカーの言葉をブルチ先生が引用されていましたが、市民がより参加できる地域づくりがうまくいっていない課題があるようです。

当地愛南町は昭和40年代から精神障害者の方が地域住民の一人として生活のできる取り組みをしている歴史があります。今は長野先生を柱として人口が減っている現状をチャンスとして捉え、障碍を持っていても地域になくはない住民として心温かい地域の方々と一緒に働く場ができつつあります。一人ひとりが「自分に何ができるのだろうか？」と役割を考えながら行動できる仕組み作りが大事だ！と海外研修を終えて自国を振り返ってみて感じるチャンスでした。

イタリア政府の予算支援が少なくなった現在は、地域の統合をして合理化を図り、精神障害者の支援を行っているようでした。以前よりスタッフが半減している場所がある様子で、チームで訪問をする地域サービスが貧弱化している？と危機感を感じておられる説明が多く出ました。その中でも、女性看護スタッフのお話では「私はプライベートの時間に文化団体に所属して活動することで、障害者の雇用の場を広げる理解を得ることができ、実際に働く場を得た。」「患者さん達が成長していくのが嬉しい」と生き活きと話し

れたことが印象的でした。

重度の三障害者の施設「ピノキオ」は明るくて開放的な可愛らしい平屋の建物でした。精神保健福祉交流促進協会ツアーでは初見学の場所でした。障害があっても自分に合う芸術や手芸・スポーツなどを学ぶ場とチャンスがあり、実際にたくさんの作品ができていました。手芸好きの私はミシンや布がある部屋で「ここで一日中楽しみたいなあ」とワクワク感じました。

また、ピノキオ施設の少し上の場所には、同じコーポが母体で障害の軽い方を対象にした「VIVA」という建物があり、自宅やアパートから通ってくる方が仕事に就く準備をする日中の活動の場がありました。3人からスタートして28人が利用されていますが、全員が集まることはなく、利用者が主体的に計画をした料理や芸術作品作り・外出などが支援されていました。とりえず一年間無料で利用し、その後の更新の終了期限はないとのことでした。開設されて3年と短い期間なので仕事につながった方が少ないようですが、5つの自治体からの支援があるようで、社会参加のできる支援サービスや工夫がされていました。「自分が希望する仕事はどのようなことなのか?」「どのような力をつければ、目標が叶うのか?」などを具体的に支援するようですが、目標とする期間は決まっていないと聞いたので「現状の評価やこれからの課題をどのように誰が責任を持ち、支援を続けるのだろうか?」と疑問が残りました。ピノキオに住む重度障害の方が次のステップとして、地域に住みながら仕事を探す場所がすぐ上の場所に見えることは「あそこへ行ってみたい」と思える希望ができて良いことだと思いました。



ピノキオ外観



VIVA 責任者の説明

精神保健の制度が充実しているイタリア北部と制度整備が遅れているイタリア南部の自殺率を比較すると南部の自殺率が低い現状があるとのこと。陽気な地域性なのか? 地域住民の相互支援があるのか? 興味のあるお話でした。「機会があればイタリア南部を見に行きたいなあ!」と夢を膨らませています。

帰国予定の6月22日はヴェローナ空港で国際ストライキに遭遇し、24時間のイタリア滞在のプレゼントがありました。事務局の仁木さんはどんなにか肝を冷やされたことでしょう。的確な判断と対応をありがとうございました。JTBが用意して下さったホテルは公団住宅のような建物が多くある場所で、研修中には感じることでできなかった一般市民の生活を垣間見るチャンスに恵まれました。スーパーのお水が安い! しかもスパークリングワインが水と同じ様な値段にビックリ! 公園では夕時の時間を過ごされている老若男女の市民の姿に出会えました。



地域の八百屋

最後のサプライズは帰国途中のルフトハンザドイツ航空の席です。なんと! 私の隣の席に機長(四本線)の制服を着たドイツ人らしき男性が着席。「キャプテン?」と尋ねる「yes」の返事。ストライキの後の移動でしょうか? 日本ではあり得ないことです。機内で配られた紙ナプキンで折り鶴を折りました。「オリガミ」と即答してくださり、大事そうに胸ポケットにしまってくださいました。機内誌の地図を出して片言の英語で交流もでき、最高の思い出が増えました。

研修参加の皆様との出会いは私の宝物になりました。本当にありがとうございました。

* 第 13 回イタリア地域精神保健視察研修ツアーに参加して

実行委員・事務局 中野 良治

前回に引き続き 2 回目のツアーに参加させていただきました。

今回の率直な感想は、明らかに 2 年前よりも厳しい話が多かったように感じた。その厳しさとは財政難と人員不足、さらに社会に排他的な流れが出てきている等、各訪問先(アレツォ・ヴァルディキアーナ・ヴェローナ、トリエステに関しては WHO の財源で運営しており他地域とは違う状況)で同様な状況の話が出てきた。この先現在のイタリアの地域精神保健システムを維持していくことは可能なのだろうかと思ってしまうほどだった。どの地域でもキャッチメントエリアの統合によるエリアの拡大、ただし予算と人員が増えているわけではなく、逆に削られている。前回訪問時も、財政が厳しい・・・という話はどの地域でも聞いたが、今回ほどの切迫感はなかった印象がある。

ダルコ Dr やボルゲーシ Dr からお話の中でも、他地域との統合は地域ごとに活動の違いがあり、急患を収容できないなど問題が出てきている。経費的な理由での合理化は地域のサービスは弱くなってしまう。ただ人員が減った現在でも何とかシステムがまわっているのは、今まで地域で支えるためのネットワークやプログラムを行ってきたから。医療レベルが下がったわけではないが、現体制が限界。また様々な職種の人たちの自己犠牲もあり成り立っているとも。さらに、大学における精神科医の養成不足や現場で専門性を持った医師不足の問題も指摘されていた。ヴェローナでは医学生も精神保健センターで勤務をしており、卒業後は貴重な人材としてイタリア各地で勤務をすること。通訳の佐藤さんとの雑談の中で、医学部の教育についても反バザーリアの医者もおり、学生もそちらに影響を受け、地域の大変な仕事は嫌がり楽な仕事に流されてしまう傾向もあると。



ダルコ Dr を囲んで

ブルチ Dr の講義の中で印象的であったことが、「新たな仕組みが機能するには 30 年を要する」という言葉。自分たちの地域はどうか？平成 28 年 6 月に御荘病院の病床がゼロとなったが、歴史を遡ってみると 1970 年代から地域での啓発、地域で暮らすための様々な医療福祉の支援や拠点、そこで従事するスタッフの人材育成等々、先輩たちが基礎を作ってくれながら後半部分は自分たちも関わることができた。ただここで終わりではなく、さらに醸成させていくためにはまだまだ時間がかかることなのだと改めて振り返ることができた。また、今後もイタリアでは予算と人員減や社会の排他的な流れもあるが、「昔には戻らない」と。もちろん法律で入院が規制されているが、これは言い切れるそうだ。通訳の佐藤さんもひどい医者たち(製薬会社から・・・)もたくさん知っているが、その医者たちも「昔には戻らない」と話す。それはイタリアの文化として根付いているらしい。バザーリア法ができ 40 年、その後、さらにそれからを引き継いできた医師たちにパッションは脈々と引き継がれ続けているのだろうか。

ストライキの影響で飛行機が飛ばず滞在日が一日延びてしまったことで、ヴェローナ郊外のホテルに宿泊することとなった。ホテルの近隣は公営住宅と思われる団地エリアでしたが、ここでイタリアの庶民の生活の実態に触れることができたように思う。近隣のスーパーで買い物をしたが、明らかに今までめぐってきた地域と商品の価格が違うことに驚いた。ミネラルウォーターやその他食料品についても 10 倍以上値段が違うものが多く、それまでイタリアの障害年金の額(正確な金額は記憶していませんが、日本の障害基礎年金よりは低額だった)でどうやってみんな生活していけるのだろうかと思っていたが、少し納



得できた。最後夜の食事はイタリアンにも少し飽き、数人で近所のテイクアウト専門のチャイニーズ店へ。なぜかみんな懐かしい味にホッとした表情が印象的でした。



今回、イタリアの社会情勢の悪化(失業率の高さや移民の問題など)に伴う厳しさばかりが目についてしまったが、やはりバザーリア法制定40年の中で「昔には戻らない」という文化が根付いていることはすばらしいと思う反面、適切な人と金がつけられなければシステムは簡単に崩壊する恐れもあることも感じた。今後の日本でも人口減や高齢化等が進んでいく中で、同様の人と金の課題が出てくるのは間違いない。しっかりとそのことは見据えておかなければと感じている。

最後に、今回私も事務局の一員として参加させていただきましたが、ほとんど仁木さんにお任せ状態。申し訳ない気持ちと、やはり仁木さんが現地との関係を丁寧につないでくださっていることを実感しました。長年本当にありがとうございます。また参加者の皆さんと新たなつながりができたことに感謝いたします。

* 事務局からのお知らせ

○ リフレッシュセミナーin 東京 2019 ～故仁木美知子さんを偲んで～ 実施報告 速報

6月29日14時から上野駅前の貸会議室で開催しました。会場には仁木さんの祭壇が設けられ、参加者全員での献花と黙とうのあとセミナーは始まりました。

最初は長野理事長の挨拶からです。そして参加できなかった方々から寄せられたメッセージが紹介されたのち、白石理事、助川先生、坂本先生からお話をいただきました。

白石理事:協会の成り立ちやヴィレッジ研修に関して、アメリカの精神保健取り組み。

助川先生:イギリス・ケンブリッジ研修での思い出やイギリスの精神保健の取り組み。

坂本先生:イタリア研修の思い出や自身の研修経験、イタリアの精神保健の取り組み。

等々、会場を交えて貴重な話し合いの場が持たれました。参加者は60名でした。

・・・会の詳細は今後紙面にて報告を予定しております。



ー編集後記ー

仁木美知子さんを偲んで開催させていただいたセミナーから愛南に帰ってきました。皆さんから、これからの協会を考える沢山のヒントをいただきました。美知子さん、谷中さんの遺言の一部を感じられたような気がします。ありがとうございました。

また、5月のイタリアに行ってきました。沢山のことを感じてきています。少しずつまとめます。長く続けること・進め続けること・進み続けざるを得ないこと・立ち止まる難しさ、。

今後ともよろしくお願いします。(長野)

特定非営利活動法人 精神保健福祉交流促進協会 TEL090-1811-7119